

リレー随筆

心理劇にありがとう

駒澤大学 茨木 博子

20代半ばに心理劇に出会って以来、心理劇にさまざまな場面で助けられ、学ばせてもらった。そこで、与えられたこの機会に、心理劇に「ありがとう」と言いたい。

会員のみなさんは、心理劇にどのように出会ったのだろうか。私は、最初の勤め先の精神科病院（八王子市）で、院長先生の勧めにより、学生時代にほとんど勉強したことのない言葉中心の集団心理療法を始めた。しかし、開始してわずか2ヶ月で挫折を味わった。この状況を何とか打開しようとスーパーヴァイザーの先生に相談したところ、臺利夫先生を紹介され、先生が実践されておられる統合失調症患者さんの心理劇グループに参加させていただいた。この時の楽しい体験と感動は、今も鮮明に覚えているが、この体験と感動が原動力となり、私は毎週そのグループに参加させていただき、体験したこと、学んだことを監督兼補助自我として勤め先の病院で実施した。

開始してまもなく、院長室に呼ばれた私は、“心理劇は危険だから止めなさい”と言われショックを受けた。患者さんの中には笑顔が見られるようになった人もいるが、その時の私は、経験不足、知識不足のため、何が危険なのかわからなかった。しかし、危険だからと言われてもそう簡単に止めるわけにはいかない私は、先生がそうおっしゃるなら、安全、安心を基本に行なえばいい、と私なりに判断し、心理劇を続けていった。しかし再び院長室に呼び出された。この時は、解雇も覚悟で入室し、謝ったところ、院長先生は、“あれ（心理劇）は良いので、週2回やってくれないか”とおっしゃった。無理な注文だったが大変嬉しかった。患者さんの笑顔や言動の変化が院長先生の心を動かしたものと思われるが、都合により病院を辞める時は、心理劇のできる臨床心理士を紹介してほしいとまでおっしゃってくださった。

以上のように、心理劇のおかげで集団心理療法の行き詰りを打開することができたが、同時に心理劇の危機にも直面さ

せられた。しかし結果的には、この時の実践が院長先生の心理劇に対する評価を変え、その後の精神科病院（郡山市）での臨床活動と研究活動の原点となった。

郡山の病院は、かつて卒業研究をさせていただいたところだが、たまたま遊びに伺った時、その診療部長の先生は、八王子の病院（100床）での私の活動に大変関心をもたれ、うちにはその4倍の患者がいるとおっしゃり、開放病棟のこういう人たちに是非心理劇をやってほしいと熱く語っておられた。当時の東北地方では、心理劇を実践している病院がなかったと記憶しているが、先生の熱意と卒業時の先生との約束（この病院に勤務すること）を思い出し、毎週東京―郡山1往復の生活を決心した。幸い本学会理事の高江洲義英先生が常勤医でおられたこともあり、心理劇との関わりはより深くなっていった。

実践では、アプローチの問題にはじまり、患者さんの表現を通してどう一人ひとりを理解し、それを次にどのように生かしていくか、の連続だった。そのような中で、ウォーミングアップの大切さや補助自我の役割、心理劇の効果と限界などがわかってきた。また心理臨床一般に言えることだが、時計では計れないその人にとって意味深い「時」（カイロス：転機）、そういう「時」の訪れを待つことの大切さを学んだ。

あの時、挫折体験がなかったら、そして院長先生の“危険だから止めなさい”のひと言に素直に従っていたら、本学会の会員にはなっていなかったかもしれない。生意気だったが、先生の指示に従わず、しかしおっしゃったことに耳を傾けながら、楽しい（苦しみも多いので「苦楽（くるたの）しい」といった方がふさわしいかもしれない）体験と感動を原動力にここまで歩んでこられたのは、心理劇のおかげである。心理劇、ありがとう。そして、これからもよろしく。

日本心理劇学会 17 回大会を終えて

米子病院／鳥取サイコドラマ研究会 大会長 宮崎良洋

中国地方で初めての開催となりました第 17 回大会は、「役割を演じるということー心理劇の可能性を探るー」を大会テーマに鳥取県米子市にて行われました。学生を含む会員や一般の方々、147 名のご参加をいただきました。これに 2 つの市民公開講座の来場者を合わせますと 200 名に達したものと推測されます。私は閉会の挨拶で「120 名を超えたようです」と申しましたが、嬉しい想定外の参加者数になりましたことをここに改めてご報告いたします。

今大会は、心理劇の実践が十分に広まっていない中国・四国において一般の方への啓蒙・普及の意味も兼ねて 2 つの市民公開講座を企画しました。まず大会主催セミナーとして前田潤先生（室蘭工業大学）による「震災復興に向けての心理劇」を大会に先立ち開催いたしました。当日は小雨の降る中、早い時間にもかかわらずたくさんの会員や一般の方など約 100 名の方にご参加いただきました。その様子は、地元新聞紙「山陰中央新報」にも大きく取り上げられました。震災復興のために心理劇は何かできるのかという可能性を見事に証明したと同時に日本心理劇学会の存在も広く知られることとなりました。また 2 日目に開催した山陰初公開となりました羽地朝和先生（NPO 法人プレイバック・シアターらんばん理事長）とそのメンバーの方々による「プレイバック・シアター」でもたくさんの一般の方にご参加いただきました。そのパフォーマンスに参加された方々から「すごいものを観させてもらった」「とても気持ちが温くなる体験は初めてです」といった素晴らしい体験をしていただくことができました。これらの公開講座を通して今後、この地方での心理劇の普及活動につなげていく目的も達成することができました。講師のお二人には感謝申し上げます。

さて、今大会の目玉ともいべき初日のマックス・クレイトン博士（オーストラリア・ニュージーランド・サイコドラマ協会設立者）による基調講演「ロールセオリーに基づく心理劇の展開」は、博士の常に主役に寄り添う温かい雰囲気の中で、ロールセオリーの体験的理解と多くの気づきが得られた貴重な基調講演となりました。博士には前日の第 15 回研修会と鳥取サイコドラマ研究会主催のポスト・ワークショップの講師もお引受けいただきましたことにも感謝申し上げます。

ワークショップでは、サイコドラマ、ロール・プレイング、プレイバック・シアター、シナリオ・ソシオ・サイコミュージカルなど 9 つの発表がありました。それぞれの発表者の魅力的な持ち味の内容に、とても良い体験をすることができたとの感想が聞かれました。

懇親会では、90 名の参加がありました。恒例の全国地区の紹介のほか防衛医科大学校の佐藤豊先生を中心とした即興「藁人形」シリーズには大いに会場が沸き心理劇学会ならではのパフォーマンスで大盛況でした。また料理も地元の豊富な食材を中心に質の高い海の幸・山の幸をご用意いたしました。参加者の皆様から満足のお声をいただき私たちも嬉しく思いました。ちなみに私は歓談に夢中でしたので、わずかに残っていたローストビーフ 3 切れをゲットすることができました。（今回は量より質に走りました。）がやはり夜、お腹は

減りました。

大会 2 日目の口頭発表では、3 会場で 11 題の発表がありました。各会場で活発かつ実りある議論が行われたと聞いております。また維新の会主催のランチョンセミナーも若いエネルギーで盛り上がったと聞いております。

そして大会最後のシンポジウムは、「心理劇の可能性を探る」というテーマで、「ゲゲゲの女房」に則って学会発足以前から心理劇を長〜く、深〜く、愛していらっしゃる 4 人の女性シンポジスト（大木みわ先生、土屋明美先生、高原朗子先生、中込ひろみ先生）に担当していただきました。その実践報告を通して、心理劇学会の（ゲゲゲの鬼太郎）こと高良聖理事長、（知恵袋の目玉の親父）こと伊藤壽夫事務局長のお二人を指定討論者に心理劇の可能性を巡って討論されました。また、今後の学会の活性化に向けてフロアからも活発なご意見をいただき、会員数の増加も含め今後の将来に向けた心理劇の可能性を考える上での一つのきっかけになればと願っております。

今大会を振り返り、たくさんの内容に企画倒れにならないようスタッフ一同、万全の体制で臨んで参りました。しかし学会開催地は米子、学会事務局は高知と離れていたため連絡もスムーズにいかなかったところもありました。準備の段階でプログラム・抄録集に不手際があり会員の皆様にはご迷惑をおかけしましたことこの紙面を借りてお詫び申し上げます。そして学会が盛況のうち無事終了しましたことは、座長など快くお引受けいただきそれぞれの役割を演じるということに徹していただきました先生方や何より「ゲゲゲの大会」に参加して大会を盛り上げていただいた皆様へこころより御礼申し上げます。

最後になりますが、「ゲゲゲの女房」の著者はこう締めくくっております。「人生は終わりよければ、すべてよし」

だから私も「学会は終わりよければ、すべてよし」ということで幕を閉じさせていただきたいと思っております。本当にありがとうございました。

「また、米子にきてごしないよ！」をお忘れなく！！

My Reflections on the Keynote Session

Dr. Max Clayton

I have felt very satisfied since conducting the keynote session on psychodrama based on role theory. During that session I experienced delight in meeting so many spontaneous people of different ages and occupations and to be involved with a number of individuals in creating dramatic interaction.

The seating arrangement brought everyone close to one another, to a small stage and to me, and assisted me to warm-up quickly and easily to myself and the group. The group members recognized different aspects of their warm-up as a result of the dramatic work and discussion with one another.

I am very pleased that the warm-up process is being seen as the central aspect of the psychodramatic method. The increasing warm-up of the group resulted in new and adequate functioning. The roles and role relationships that were enacted brought about a learning process that was light and enjoyable and certainly resulted in an increase of my own

sense of vitality and of the value of all human life.

Thank you for inviting me to this wonderful conference and for the opportunity to conduct this session with all of you and also two workshops and to be surrounded by a strong commitment to learning that is combined with such friendliness and sensitivity.

(訳) 基調講演のセッションを振り返って

マックス・クレイトン

ロール・セオリーに基づいたサイコドラマで基調講演のセッションを行ってから、私はとても満足感を覚えています。そのセッションの間にいろいろな年代や職業の自発性に富んだとてもたくさんの人々に出会い、ドラマ的なふれ合いを生み出すなかで何人もの人と出会えたことを嬉しく思いました。

椅子の配置の仕方は、それによってみんながお互いに、また小さな舞台や私の近くになり、私が自分自身とグループに素早く楽にウォーム・アップするための助けになりました。グループのメンバーは、彼らのウォーム・アップのいろいろな側面がドラマ的なワークとお互いのディスカッションの結果であることを認識できたことと思います。

私はウォーム・アップのプロセスがサイコドラマの核心をなす側面であると理解されていることをとても喜んでいました。新しい適切な振る舞い方が生まれたのは、そのグループのウォーム・アップが高まっていった結果でした。そこで演じられたロールとロールの関係性は、肩のこらない楽しめる学びのプロセスをもたらしてくれ、そして確かに、私自身が元気になる感覚やあらゆる人間の命の価値に対する感覚を高めてくれる結果になりました。

私をこのすばらしい学会に招いて下さってありがとうございました。そして皆さんと一緒にこのセッションや二つのワークショップを行う機会を与えてくださり、好意と思いやりをもって熱心に学びに関わってくださった人々に囲まれる機会を私に与えてくださったことに感謝いたします。

(中込ひろみ訳)

日本心理劇学会 17 回大会ワークショップ

A:『トラウマワークとしてのサイコドラマ』

佐藤健太郎 (東北大学大学院教育学研究科修士 2 年)

ワークショップ A では、自然災害や虐待のトラウマを扱う際のサイコドラマの留意事項などについて話し合いを行った。参加者に、虐待トラウマに詳しい先生、自然災害トラウマに詳しい先生、サイコドラマに長年精通している先生方がおり、話は止まることなく続いた。その中で出た内容をいくつかあげると、①自然災害・虐待をサイコドラマで扱うにあたっては、安心・安全な状況が確保されていることが絶対条件であること。②トラウマの怒りを演じる際は怒りを表現することで自分にどのような意味をなすのかを Dir がしっかり深めてから行うことが大切。例えば、怒りをぶつける場面だけだと抑圧されたものを開けるだけになってセカンドレイブのような状況になる可能性があるため、本人が一步引いて語れるようになってから扱うことが望ましい。③話したくない人には無理強いをしないこと、そのためには 1 対 1 の関係で

臨床心理士らで組織する日本心理劇学会が 3、4 の両日、米子市米子広町の米子コンベンションセンターで開いた第 17 回大会に合わせ、東日本大震災をテーマに取り上げた心理劇の公開講座を初めて企画した。一般市民が、学会員らが演じる即興劇を通して復興の鍵を握る絆の大切さや、目標に向かって手を携えることの重要性を考えた。

復興の鍵は絆や目標

心理劇学会・米子で公開講座



劇の配役を決める前田潤准教授（左）と参加者

大震災テーマに即興劇

個人の役割考える

心理劇は、参加者が設定したテーマに沿って即興で役割を演じながら思いを共有、自分や他人の立場に考えを巡らせ、直面している課題や問題の解決に立ち向かう集団精神療法で、治療、教育、福祉などの現場で注目されているという。公開講座は「震災復興に向けての心理劇」をテーマに、学会員ら約 100 人が参加。室蘭工業大ひと文化系領域大学院の前田潤准教授（臨床心理学を講師に、大震災がもたらした個

人々の襲撃や心理的不安をあぶり出し、復興のために何が求められ、何をしなければならぬのかの道筋を探った。公開の心理劇では、実際に福島県内で震災や東電福島原発事故などの学会員を主人公に設定。残る学会員らが原発関係者、農家、漁師、市民といった役割を即興で演じながら、主人公が思い描いた脱原発や大震災の達成への道を胸に描いた。指導に当たった前田准

教授は「心理劇を通して何が起きたのかを自ら確認し、苦しみを共有することで絆が強まり、共有の目標に向かっていける」と話した。

山陰中央新報 2011 年（平成 23 年）12 月 5 日より

まずは本人の話を聞くことが重要である。④自殺を考えている人に自殺するロールプレイをする際には、その人の「本当は生きたい!」という思いを前提にして、それを助長させるような場面展開にすること、などが話し合われた。

私がこの話し合いの中で強く感じたことは、普段異なる現場・クライアントと関わっている先生方と、それぞれが持っている知見を交換しあうことで、よりサイコドラマの可能性が広がるということであった。私は、普段サイコドラマを青年期自閉性スペクトラム障害者と一緒に行うことが多いため、虐待・自然災害などによりトラウマを抱えたクライアントに対するサイコドラマに接する機会はなかった。しかし、今回のワークショップをへて、私は今まで自分の中になかったサイコドラマの可能性（例えば、トラウマへの怒りをどう場面にのせていくかなど）に気づくことができ、さらなる情熱を持ってサイコドラマに取り組む意欲が生じた。また、私の中で「輪」も広がった。他分野の先生方と実際にお会いして、サイコドラマについて話し合うことで、自分の東北大学における「輪」だけでなく、全国各地でこのようなサイコド

ラマの「輪」があることを実感した。私はこの「輪」をそのままにするのではなく、もっともっと大きな「輪」にしていくべく、様々な先生方とサイコドラマについてもっと話しあっていたらとワークショップを通じて感じた。

.....
B：『オープングループでのサイコドラマの技法2』
谷井淳一（ルーテル学院大学）
.....

佐藤豊先生の「オープングループでのサイコドラマの技法2」に参加した。オープングループにおいて参加者の不用意な自己開示を制限しながらも、主役の内面に焦点があたるような構造化されたセッションの方法を提案するという趣旨のワークショップであった。

円形に並んだ座席の移動を何回かしたあと、目を閉じて下を向き顔をあげた際に最初に目があった人とペアになるというワークを行った。さらに自分にないものを持っている人、自分と共通のものを持っている人、助けてあげたいと感じる人、を直感的に選んで肩に手を置くというウォームアップを行った。次にセルフケアカードというおもて面に英単語ときれいな配色の絵が描いてあるカードを床に並べて、その中から一番好きなカードを選ぶことになった。私が選んだのは pleasure というカードで、きれいな女の人と猫が遠くを見つめている絵が描かれていた。また裏には、短い英語の文章で大いに楽しみなさいというようなことが書かれていた。選んだカードは部屋の中の好きな場所におくことになる。

続いて2人組をつくり、交代で主役とダブルを体験することになった。主役は「最近私は〇〇である。気持ちは△△である」と語り、ダブルはそれを主役の横で繰り返す。役割交換をし、主役はダブルとしていたわりの言葉をかける。最後に主役はカードのところ（ミラーの位置）に行き、椅子にのった高い位置から、カードの気持ちになってダブルに言葉をかける。そして、役割交換してダブルが発するその言葉を主役は聞く。カードは自分が気に入ったカードであり、自分の気持ちの一部を代表しているもので感情移入しやすかった。

ペアによっては感極まって少し涙ぐむペアもあり、想起した内容そのものは主役以外には分からないが、主役はこころの奥底に触れる深い体験が可能であったと言える。また、ダブルの体験、ミラーの体験がうまくコンパクトに配列されており、初めて参加した人にとってはサイコドラマの各種技法を体験的に知るという意味があった。とはいえ、参加者全員が主役となるわけで、約10組のドラマがそこで同時に展開される。監督は総合プロデューサーとして全体の指揮をしながら、ドラマー一つ一つにも気を配る必要がある。感情が高まりすぎる危険が全くないわけではなく、熟達した佐藤先生だからこそできる名人芸であると感じた。

.....
C：『ナチュラルにニュートラルに⑤「人生の贈り物」～どうにもならないことが何とかなる贈り物はあるか～体験記』
岡嶋一郎（長崎純心大学）
.....

発表者の金子賢先生が今回のテーマを提案されたのは、3月の大震災よりも前のことであったそうである。しかし、震災が起こったことで、副題の「どうにもならないこと」について考える今回のワークショップの意味がよりクリアになったというお話から、ワークショップはスタートした。

具体的な内容は割愛させていただくが、ワークショップで

は、まず自己紹介が行われ、その後、小グループに分かれて、「どうにもならないことと、その中で起こる気持ち」について体験談等を、長く話し合った。その後、主役となった人のストーリーに対して、観客であったメンバーが思い思いに、主役の力になると思う贈り物（空気のプレゼント）を持って主役にはたらきかけた。

私たち支援者は、どうやってもうまくいかない、どうにもならないという鬱積した気持ち、意気消沈する気持ちに対して、どのように関わることができるのか。支援する側のひとりよがりにならないで、その人が生きる励みになる関わり方とは、どのようなものか。今回のワークショップでは、このことを強く考えさせられた。そして、そのヒントは、こちらが焦ることなく主役が本当に語りたいメッセージを丁寧に聴くことにあるような気がした。

ワークショップの最後に、メンバーで集合写真を撮る劇をした。教えていただいた先生と共に学んだ我々との皆が写った空気の写真は、今回の経験を心に残す証拠の品物となった。今後、自分がどうにもならないことに向き合ってもなお夢見る勇気を与えてくれる一物になるかもしれないと思うので、大切に持っておきたい。

.....
G：『最先端技法でプレイバックシアターを楽しむ』
面高有作（特定医療法人佐藤会弓削病院）
.....

学会案内が1号通信、2号通信と届く中でワークショップをどれにするかは決めかねていた。せっかく熊本から米子に行くのだから、参加できるものはできるだけ参加したいと欲張りな気持ちが強かったことを覚えている。締め切りが近づき、そろそろ決めないといけなくなっても、「G：最先端技法でプレイバックシアターを楽しむ」ともう一つのワークショップとで迷っていた。物事を決めるのに迷った経験はあまりないのだが、今回はなぜか本当に迷った。決め手になったのは「最先端技法で…」であった。「わさもん（早生者：新しいものが好きな人の意。これも県民性の一つにあげられる）」魂に火がついて、このワークショップに決めた。

私自身のプレイバックシアターの経験は、3～4回ほどである。アクターの経験は、ほとんどなかった。しかし、興味が先行し、わくわくした気持ちで参加した。

ワークショップの参加者は10数名で、アットホームな雰囲気の中、ウォームアップをし、プレイバックシアターを体験した。特に印象に残っているのは、3名が一つのグループになり、それぞれにアクター体験をしたことである。音楽に耳を傾け動き出すタイミングをはかり、他の2名とともに言葉や動きでテラーの一場面を表現した。時には、色とりどりの布を自分なりに選んで使うなど、楽しみながらプレイバックシアターを学ぶことができた。

ワークショップ中や終わった後に、「最先端技法…でなくて、基礎になってしまった」と櫻井先生は何度かおっしゃっていたが、私にとっては非常に新鮮な、「新しい」体験ができ、学びが多かった。学会から帰ってきて、臨床のフィールドである精神科病院で、早速ワークショップで学んだ、もしくは触発されて浮かんだアイデアのいくつかを試してみるほどであった。

今振り返っても、非常に刺激的なワークショップだったと思っている。

H:『今ここでのロールのいのちを描く』 今井裕子 (雷門メンタルクリニック)

マックス・クレイトン博士によるアクションを用いた基調講演が冷めやらぬうちに、ロールセオリーをより学び、体験する為のワークショップ (以下WS) が始まりました。

前半は、大会前日には同博士が研修 (プレWS) をされていたこともあり、その参加者が「研修で最も印象に残ったこと」をスカルプチャーで表現した後、基調講演でプロデュースされた「学びたい私」「それを妨害する私・物」を、3人1組になってそれぞれロールとプロデューサー・主役を体験しました。各グループでその体験をシェアした後、更に「私がウォームアップしているもの」「それを阻むもの」2つのロールと、主役・監督役の4人1組で、同じように主役とプロデューサーを体験しました。

中込先生はロールセオリーについて、ロールとは主役自身が経験している、関係によって生じる反応であるということ・人の心に一瞬一瞬に色々なロールが生じるのでプロデューサーはそれを素早くキャッチして表現すること・主役の表現したものを、プロデューサーも遊びながら、楽しみながら表現し、評価することなくそれを味わうこと・ロールを出して、アクションにして、台詞をつける、それらを1つ1つ行うこと・ロールに名前を付けると主役はそれを取り込んで維持し易くなること、等を語られました。

WS後半は中込先生がプロデューサーとなり、1つのドラマを取り上げてロールリバースで展開し、シェアの後、全体でレビューがされました。先生のプロデュース場面で、主役が「ウォームアップしているロール」に入り、自分自身から去ろうとすると、先生は「そんなに簡単に無くなりませんよ、良く話し合ってください。」とすかさず言い、ロールリバースで主役を再び葛藤場面に戻し、「ウォームアップしているロール」「それを阻むロール」それぞれの声と存在を確認させ、主役が新しい決断を下したシーンとはれも印象に残りました。まさに、私はプロデューサーとしての自分の判断や感じている事、何が主役に起きているのかを考え始めると、判断できなくなり、ドラマに生じる一瞬一瞬をつかめなくなってしまいます。WSでは、私が学びたいと思うことを目の当たりにし、心を新たにそれに組み込みたいと思いました。

感想を書くにあたって、基調講演からWSに至る体験を整理すると、ドラマではありませんが「私の学びたいもの」「それを阻むもの」を表現することとなりました。上手く出来ているな、というのが今の心境です。

I:『シナリオ・ソシオ・サイコ・ミュージカル』 福田弘子 (八戸マナクリニック)

私は、サイコドラマの経験も浅く今回の大会が初めての参加となりました。サイコドラマの不思議な魅力に惹かれている反面、自分を表現することに対する苦手意識が強く緊張感でいっぱいでした。

部屋に入ると、不思議なオーラが漂っており、ほっとするような空気に包まれ、増野先生の笑顔と優しい雰囲気の中で「シナリオ・ソシオ・サイコ・ミュージカル」が始まりました。増野先生が生まれてから現在までの足跡が精神保健の歴史の流れの中でドラマ化されていました。

シナリオが完成され、主役も決まっていたため、残りの人

物の配役を当日参加者で担当しました。台詞が有るので負担は少なく、物語が進むにつれ頭の中にイメージされ、いつしか役になりきっている私がありました。

「シナリオ・ソシオ・サイコ・ミュージカル」は初体験でしたが楽しく参加させていただきました。増野先生の生き方やサイコドラマの歴史を通して、震災や病気のことなど自分自身が抱えていた不安感・恐怖感が「恐怖の歌」「友達はいもんだ」の歌とともに砂のようにさらさらと流れ出し、心が軽くなり、前向きな気持ちに変化していました。

ワークショップに参加し、貴重な体験をさせていただきました。増野先生、参加者の皆様ありがとうございました。

日本心理劇学会 15回研修会を終えて

心理劇学会研修委員長 島谷まき子

第15回心理劇学会研修会は、第17回心理劇学会大会日程に合わせて、大会前日の12月2日(金)午後2時から7時半まで鳥取県米子市の米子市文化ホールで行われました。今回の研修会は、マックス・クレイトン博士を講師として「ロールセオリーに基づく心理劇の体験」というテーマで行われ、計25名(研修委員を含めて29名)が参加しました。

中込氏のわかりやすくて確かな通訳のもと、クレイトン博士の変幻自在な、ときにユーモアのある、刺激的なワークショップが展開されました。研修会で体験した理論的背景については、大会1日目の博士の基調講演「ロールセオリーに基づく心理劇の展開」で知ることができ、一層有意義な研修会となりました。

研修会参加者の感想の抜粋を紹介します。*とても楽しく勉強になりました。体験を忘れず今後も励みたいと思います。*初参加で緊張したのですが、最後まで楽しく過ごすことができました。*本当に充実した時間でした。*いろいろたくさんものを持ち帰ることができてとてもうれしいです。*今回初めてサイコドラマを体験しました。普段感じることのない思いを感じることができてとても有意義でした。

なお、研修会開催にあたっては、第17回大会事務局関係者の方々に大変お世話になり、ありがとうございました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

ロール・セオリーとの出会いから 中込ひろみ (ヒムサイコドラマワークショップ主宰)

サイコドラマの旅の中には、ドラマチックな出会いがいくつも重なっているものである。

サイコドラマと私の初めての出会いは、心理学の本の中のサイコドラマについての短い説明にも完全に魅せられるような思いがした時である。その直後に栃木県の当時の精神衛生センターで増野先生のサイコドラマを経験できたことがサイコドラマとの実践的な出会いだった。その衝撃的ともいえる体験でますますサイコドラマの虜になった。私がメルボルンのマックス・クレイトンの下でサイコドラマのトレーニングを受け始めたきっかけも、サイコドラマにますます関心をつのらせている時に夫の転勤でメルボルン在住が決まり、当地でサイコドラマを勉強できるところを捜し求めていた日々、図書館の壁にサイコドラマのワークショップのチラシを

見つけたことだった。そして帰国後も栃木県に高良先生はじめサイコドラマを好きな人々がいてサイコドラマを体験できる場所があり、磯田先生のインスティテュートや東京のサイコドラマ研究会ともつながって、多くの出会いによってサイコドラマへの関心と学びはますます深まっていった。

私はマックスのサイコドラマの原理や基礎になっているロールセオリーに魅せられ、これまでそれに多くの時間を費やしてサイコドラマを学んできたので、サイコドラマ的には「オーストラリア生まれ」だと感じている。これまで20年以上ずっと南国に通い続けて、多くのサイコドラマやトレーニングのワークショップに参加し続けてきた体験や、マックスが書いた本を繰り返し読んで訳していることなどが、現在の私のサイコドラマの指針であり、マックスの通訳の役割をしていることとも深くつながっている。

マックスの通訳をする時、今ここでのウォーム・アップが下がらないうちに訳すように、ウォーム・アップの「間」を一番大切にしようとして教えられてきた。そうするためにはディレクターと通訳との呼吸を合わせることが必要で、通訳をしながら、同時にディレクターとしてのマックスの呼吸や振る舞い方を感じ取り、ダブルをするようにディレクターのあり方を学び取っている。マックスの通訳の原理は“ウォーム・アップいのち”のサイコドラマのディレクターとしての訓練とも重なることが多く、通訳の役割はそのことにも生かされているように思う。今となって、通訳はプレッシャーではなく、喜びになっている。

マックス・クレイトン博士のサイコドラマに参加して 稲永澄子 (カウンセリング・オフィス ハートフル)

今年の心理劇学会は、鳥取県米子市のコンベンションセンターで開催された。私は、久々のサイコドラマ参加で、プレとポストを含めて、マックス漬けの4日間だった。マックス博士の今回のテーマは「ロールセオリー」と「ウォームアップの意義と重要性」だったが、数年前、博士の著書を訳出するプロジェクトが持ち上がった時、私の担当箇所は、まさに、このウォームアップの意義と重要性だった。その頃から私は、ウォームアップとウォーミングアップの違いがよくわからず、とうとう訳出を投げ出すことになってしまったのだが、今回、博士から直接教えを受けて、その意味がよくわかった。その時々にはウォームアップした（湧きあがった）気持ちを一つ一つロールとして取り出して彫刻し、観客の目に見えるようにする手法はみごとな物だった。博士には、その人のウォームアップが手に取るように見えるらしい。グループの中からウォームアップしているメンバーを1人選んで舞台に誘う。メンバーは博士に手を取られ、吸い寄せられるように舞台に登場する。博士が読み取るノンバーバルな情報はプロタゴニスト本人もびっくりするぐらいである。

その他、博士から教わったサイコドラマの仕立て方で大切なことを挙げてみる。第1に crisp and crispy (歯切れのよさ、明確さ) ということである。ウォームアップも次々に変わって行くので、すばやく捕まえないとあっという間に逃げてしまうのである。第2に、プロタゴニストのウォームアップが下がってきた時、博士が好んで用いる手法、誇張である。舞台の上をダブルとともに走らせたり、時には観客全員がダブルとなって舞台に登場する。まさに演出家としてのディレクターの面目躍如である。第3は、ロールリパースによって、

相手役をウォームアップし、場面が展開して行くやり方である。第4は、グループ全体をウォームアップするのに用いるソシオメトリーである。監督役を指名して、後はその人にメンバーを選んでもらい、博士がやって見せてくれたことを、今度は自分たちで行うのである。まだまだあったかもしれないが、私が記憶していることはこれくらいである。本当にマックスマジックに魅せられた4日間であった。ここに博士と大会関係者に厚く御礼申し上げる。

日本心理劇学会 第18回大会のお知らせ

日 程：平成24年12月15日(土)

特別講演・一般演題(ワークショップ)

16日(日) 一般演題(ワークショップ)・会長講演・シンポジウム

場 所：駒澤大学 深沢キャンパス アカデミーホール(東急田園都市線「駒沢大学」下車徒歩20分)

(〒154-0081 東京都世田谷区深沢6-8-18)

大会長：茨木博子(駒澤大学文学部心理学科)

実行委員長：島谷まき子

(昭和女子大学人間社会学部心理学科)

大会テーマ：科学としての心理劇を考える——さまざまな視点から——

特別講演：臺 利夫(筑波大学名誉教授)

シンポジウム テーマ：科学としての心理劇を考える——さまざまな視点から——

シンポジスト：検討中

参加費：会員・準会員7,000円 学生5,000円
非会員8,000円

懇親会費：3,000円(会場：深沢キャンパス 洋館大ホール
18:30～20:30 予定)

現段階での予定になりますので、詳しくは1号通信をご覧ください。

第16回日本心理劇学会研修会のお知らせ

日 程：平成24年12月14日(金)

午後2時～7時半(途中休憩含む)

場 所：駒澤大学深沢キャンパス(東京都世田谷区)

研修内容

A：心理劇を学ぶ(レクチャーと体験)

講師：高良聖(明治大学)

B：発達障害の心理劇

講師：吉川昌子(中村学園大学)

C：技法の展開 —マジックショップ—

講師：増野 肇(ルーテル学院大学)

土屋明美(東京薬科大学)

古賀 聡(医療法人十全会おおりん病院)

各研修のねらい

研修A：学生や非会員を主対象とする入門・基礎コース

研修B：対象別心理劇のひとつとして発達障害をとりあげる

研修C：マジックショップの技法を3人の講師がどのように使うかを出し合い、マジックショップのさまざまな展開を学ぶ

参加費：会員：6,000円 非会員：7,000円 学生：2,000円

定員：研修A：40名程度 研修B・研修C：25名程度
現段階での予定になりますので、詳細は研修委員会にお問い合わせください。

研修会・ワークショップのお知らせ

東京サイコドラマ協会主催 2012年度ワークショップのご案内

日時：毎月第2土曜日
13：30～16：00（8月・2月はお休みです）
会場：上智大学四谷キャンパス 9号館3階教室 or 心理学
図書資料室 or カウンセリング研究所、他。
→アクセスガイド http://www.sophia.ac.jp/J/sogo.nsf/Content/access_yotsuya
キャンパスマップ http://www.sophia.ac.jp/J/sogo.nsf/Content/campusmap_yotsuya

【オープングループ】

責任者：東京サイコドラマ協会認定ディレクターが月替わりで担当します。ディレクターごとに違った味わいのドラマをお楽しみください。

サイコドラマの普及を目的とした、どなたでも参加できるグループです。予約などは必要ありませんので、当日、開始時間までに会場にいらしてください。開始時間を過ぎてからの参加はできませんので、余裕を持ってお出てください。

治療目的のものではありませんので、治療を必要としている方は、医療機関にご相談ください。

参加費：1回3,000円

【問い合わせ・申し込み先】

東京サイコドラマ協会事務局
〒350-2204 鶴ヶ島市鶴ヶ丘27-12-207 心理オフィス
TMS内

FAX：049（286）0878

Email：drama@mb.infoweb.ne.jp

（件名に「サイコドラマ」と入れてください）

TMSサイコドラマ研究所主催 【サイコドラマトレーニング合宿】

【日時】 H24年4月29日（日）
13：00～30日（月・祝）16：00

【練習テーマ】 ファーストインタビュー

【日時】 H24年7月15日（日）
13：00～16日（月・祝）16：00

【練習テーマ】 ウォーミング・アップ

【日時】 H24年9月22日（土・祝）
13：00～23日（日）16：00

【練習テーマ】 イメージアップと主役選択

【日時】 H24年11月24日（土）
13：00～25日（日）16：00

【練習テーマ】 ファーストインタビュー

【日時】 H25年1月13日（日）
13：00～14日（月・祝）16：00

【練習テーマ】 ダブル

【定員】 各回15名まで

【トレーナー】 小笠原美江

（東京サイコドラマ協会認定トレーナー）

【スタッフ】 石井里美

（東京サイコドラマ協会認定ディレクター）

【参加費】 全回参加 120,000円 *3回分納も可
各回参加 25,000円（宿泊・食費を含む）

【問い合わせ・申し込み先】

心理オフィス TMS

〒350-2204 鶴ヶ島市鶴ヶ丘27-12-207

FAX：049-286-0878

Email：drama@mb.infoweb.ne.jp

お問い合わせはFAXあるいはメールでお願いします。

メールの際は件名を『TMSサイコドラマ問い合わせ』としてください。

第15回ロール・プレイング特別研究会

主催：横浜ロール・プレイング研究会

日時：2012年7月28日（土）13：00～18：00

会場：横浜市立大学

（京浜急行「金沢八景」駅より徒歩5分）

「いちょうの館」正門入ってすぐ右手

参加費：5,000円（学生2,000円）

講師：川幡政道（横浜市立大学教授）

申込み：Eメール、FAXまたは郵送で

横浜ロール・プレイング研究会まで

Eメール：kawahata@yokohama-cu.ac.jp

FAX：043-295-2281（川幡）

〒236-0027 横浜市金沢区瀬戸22-2

横浜市立大学国際総合科学部心理学研究室

◆ 広報委員会から ◆

本号は、日本心理劇学会第17回大会、第15回研修会の報告記事を中心に紙面を構成致しました。17回大会では、大会長宮崎良洋先生、大会事務局長山内学先生をはじめ、運営に協力していただきました皆様には大変お世話になりありがとうございました。また15回研修会では、研修委員長島谷まき子先生をはじめ、Max Clayton先生、中込ひろみ先生、研修委員の先生方にはご苦勞様でございました。すべてのワークショップの感想を掲載できなかったことは、広報委員会の不手際でございます。発表者・司会の先生方には申し訳ございませんが、何卒ご海容くださいますようお願い申し上げます。大会関連の原稿をご依頼申し上げた皆様方にはお忙しいところ大変ありがとうございました。また、次年度大会、次回研修会の情報も掲載し、リレー随筆は次年度大会会長の茨木博子先生にご執筆いただきました。

ニューズレターは、会員の皆さん相互の情報交換のための記事を中心に、4月1日と10月1日に発行しております。次号は、9月1日発行予定です。発行日の1ヶ月前までを目途に、原稿をお送りください。投稿も大歓迎致します。ニューズレターに関するご意見、ご要望もお寄せください。

なお、いただきました原稿につきましては、紙面の都合で短くさせていただいたり、常任理事会、理事会等で掲載を検討させていただいたりすることもございますので、ご了承ください。

なお、投稿・お問い合わせにつきましては、下記をお願い致します。

<ニューズレター原稿送付・問い合わせ先>

Email tokita.gaku@nihon-u.ac.jp FAX 03-3749-6982 (時田 学)

◆ 事務局から ◆

2011年12月の第17回大会時に開催された理事会・総会において、2010年度決算報告を無事に終えることができ、最も難題でした前事務局からの会計面の引き継ぎを完了することができました。遅ればせながら、2011年度の年度会費は昨年秋より徴収させていただき、現在も会費を学会口座に振り込んでいただいている状況です。まだご入金いただけていない会員の方々もかなりいらっしゃいます。よろしく願いいたします。

さて、2012年度がスタートいたしました。第18回大会、第16回研修会も例年通りのスケジュールで準備されております。諸事情により足踏みしておりました「活性化プロジェクト」の一環として「全会員向けのアンケート」なども計画されております。

また、インターネット、Eメールの普及に伴い、ホームページの充実、Eメールによる情報交換をより活発に行うことにより、会議費、通信費等の削減も図っていきたく思っております。

○ 新入会員の紹介と連絡先不明者

新入会員

会員番号	氏名	資格	勤務(所属)
11588	蓮井 淳	正会員	横浜ロール・プレイング研究会
11589	鈴木 清	正会員	横浜中央児童相談所
11590	足立 翔子	正会員	徳島県警察本部少年サポートセンター
11591	文 成峰	正会員	天津市(民間心理相談センター)
11592	柳川 比呂子	正会員	Studio 樹
11593	植村 和子	正会員	(株)東京メンタルヘルス

連絡先不明者 (ご存じの方は事務局までご連絡ください)

95096 岡部 利恵子 99405 横山 直子 01462 光岡 征夫
06519 中本 晋作 07536 我如古 梓 09561 村上 元

日本心理劇学会

事務局

事務局長 伊藤壽夫 (いとう ひさお)

〒236-0027 横浜市金沢区瀬戸 22-2

横浜市立大学 臨床心理学研究室気付

E-mail psy5role@yokohama-cu.ac.jp

FAX 044-511-5261

払込口座番号 00100-4-36657